



『マ・ミミ』

13~4年前のある木曜日の夜。疲れて仕事から帰ってくると、マンションに鍵がかかっていた。中は、暗く、いるはずの彼女の姿がない。彼女専用の引き出しに服もない。テーブルに置手紙がある：「ありがとう」「さよなら」「連絡しないで」…。痛い！逃げられた。結構ショックだった。

ダメ男は、眠れず、仕事にもならず、金曜日夜までなんとか生き延びた。その夜は、徹底的に飲んだ。翌朝つぶれていたダメ男に、電話が来た。「もしかして」と慌てて出たが、男であった。

近くの商店街のペットショップのご主人：「ロッドさん、子猫の里親を探しているボランティアから連絡がありましたよ」。ずいぶん前だが、猫を飼いたいと話をしたことがあった。

フランスでは猫と一緒に暮らしていたため、日本で安定した生活ができれば、

捨て猫を飼おうと。名前まで決めていた。雄なら、人生で飼った最初の猫と同じ名前：Titi、雌なら、Mimi と。「今」から逃げて、変化を求めている。連絡し、すぐに会うことにした。

ボランティアとしばらく探し、そして「あの子」は、いた。逃げるように隠れる、真っ白な小さな体、真っ青な目。女の子だ。ペットショップでトンキーズとラグドールの禁じられた愛で、生まれたらしい。兄弟もいたが亡くなった。かわいそうなミミ。美しいミミ。私は、一目惚れだった。でも、ミミに完全に無視されていた。

それでも、がんばった。ボランティアの二人のおばあちゃんに住んでいたマンションを見せて、面接も受けた。「結婚する気は、ないですか?」、「生活のリズムは?」、なども聞かれた…。問題は、あった。不妊去勢は、義務付けられていた。でも、私は、ミミに子どもを産ませたいと考えていた。おばあちゃんたちを説得した。

そこから、ミミとの暮らしが始まった。ミミとは、少しずつ知り合い、甘えてくれるようになった。私の頭のそばで一緒に眠るようになった。帰ってドアを開

けると、その前で待っていた。出張で少しうちを空けると、布団におしっこもよくかけられた。すっかりラブラブで、幸せ、もう彼女はいらないと思っていた。

だが、数年あと、またある日。パートナーと出会った。最初の6年間、ミミは彼女を無視し続けた。パートナーのマンションに預けた時などは、ソファや、バスマット、部屋の壁まで汚した。彼女は、カンカンだった。

葉山の木造の古民家に住み移り、一緒に住むようになった。引越してすぐ、ミミは、1週間いなくなった。町中、死ぬ気でミミを探しても見つからず。そして、突然帰ってきた。

パートナーとはいつまでも仲が悪かったが、一昨年、ある日突然、2人は仲良くなっていた。7年経って、ようやくミミがパートナーを家族と認めたのだった。それほどミミは、私のことしか認めない特殊な猫だったと自慢した。

ミミは、変わった猫である。古民家の窓も自分で開け、押入れにも勝手に入る。重いドアも、建て付けの悪い網戸も、何でも開けて庭に出て遊んでいる。

仕事から帰ってくると私道まで出て「にゃー」と迎えてくれるようになった。もしかすると、この子は、犬か？と思うこともある。

また、お湯が好きだ。私がお風呂に入ると、かならずやってきて、湯船のそばでしばらくお湯をなめる。すっかり葉山の暮らしが気に入っているようだ。

ミミは、結局、子どもを産まなかった。昨年、ミミは、突然、病気になって、重い子宮摘出手術もした。パートナーと二人で、看病した。

14歳を越えて、おばあちゃんに近づき、ボケも心配な年齢になってきた。頑固さが増し、最近では餌の文句が多い。数回で飽きて、二度と食べない。パートナーは、10種類くらいの餌を用意して、飽きないように工夫しているようだが、それでもニャーニャー抗議が激しい。

寒くなった最近では、暖房機のスイッチも自分で押せるようになった。

そろそろ、開けたドアも閉めてくれるようになるのではと、期待している。

日本に来て、30年。その半分近く、一緒に歩んできたミミと出会ったパートナー。いつも（元・）ダメ男を守ってくれて、ありがとう。

昔は、ふられて、よかった。

ドキュメンタリー・ディレクター、ジャーナリスト
ロッド マイヨール (Rodrigue Maillard-Belmonte)

